

令和5年度 第1回 川崎市岡本太郎美術館部会 会議録

■日時 令和5年11月9日(木) 14:00~15:10

■場所 川崎市岡本太郎美術館 創作アトリエ

■出席者

委員 加藤弘子、長門佐季、橋本善八(部会長)、藤嶋俊會

事務局 土方(館長)、佐々木(副館長)、佐藤、山崎、片岡、重森、石原、喜多、澤田、
細川、澁谷、千村、鈴木、笹川(市民文化局市民文化振興室)
小山(指定管理者)、山内(指定管理者)

■傍聴者 1名

■議事

・令和5年度 事業経過・予定について

1 展覧会事業

(1) 企画展

ア 「顕神の夢—幻視の表現者—村山槐多、関根正二から現代まで」展

イ 「凱旋!岡本太郎」展

ウ 「TARO賞の作家III 境界を越えて」展

エ 「第27回岡本太郎現代芸術賞(TARO賞)」展

(2) 常設展

ア 「岡本太郎と太陽の鳥」展

イ 「岡本太郎とスポーツ」展

ウ 「(仮)岡本太郎:人のかたちと表現」展

2 資料収集・整理、調査研究

3 作品の保存・修復、貸出

4 普及企画

5 広報活動

6 施設・設備の整備

7 その他:予算・決算、統計データ等

(1) 予算・決算

(2) 統計データ

(3) 展覧会ポスター

・その他

■議事録

開会に先立ち委員に委嘱状を交付。

○開会

【土方館長挨拶】

【配布資料確認】

【会議公開・議事録作成に関する説明】

事務局より全委員の半数以上である4名出席により、会議の成立を報告。

傍聴希望があった場合、公開とする旨を確認。

傍聴希望者1名

【部会長の選出】

部会長について、事務局から引き続き橋本委員の就任を提案し出席委員の同意を得て選出。

【橋本部会長挨拶】

【事務局より議題1（展覧会事業）について説明】

藤嶋委員： 最初の顕神の夢展は今までなかなか観られなかった展覧会で面白かったが難しかった。章立てもどうなるのかなど、この作家はどっちに入るのかということもあったし、個人的なことかもしれないが、第5章越境者たちに馬場まり子の作品がいきなり展示されていてびっくりした。なぜ馬場まり子がここなのかと思ったが、自分でもその後考えたり調べたりして確かに越境者たちにも入るのかと、選んだ方はすごいと驚いた。展覧会というものにはあまりはっきりわかるものではないなど。わからないところからということもある。美術館共同で学芸員の人と一緒にやっているので、その苦労というか、あいまいなところは物凄く難しかったのではないかと思うので、そのあたりの説明をいただきたい。

館長： まずこの展覧会は5つの美術館の共同企画。地域創造の助成金をいただき実現出来た。わかりにくいという御指摘はよくわかる。というのは、いわゆるモダニズム、美術史の決まった流れをもう一度問い直そうという試みなので、価値観がずいぶん錯雑とする部分はあったかと思う。あえて関根正二や村山槐多のような作品を、あのような形で無名の作家や、中園孔二のような作家と同じ会場に並べるということ自体今まで出来なかった。そういう意味で今までの美術史的な見方から少し違った見方で改めて作品を観てみたいというのは企画者の共通した認識であった。馬場まり子を選んだのは本展企画者の一人である江尻潔氏。いつも共同企画で思うこと

は、それぞれの美術館あるいは担当者の価値観は優先しなくてはいけないということで、主催館はそれぞれの館の思いや考え方を織り込みながら少し凸凹はするが逆にそれがふくらみになるという様な考えを持って行っている。

加藤委員： 私も拝見して大変面白いと思った。近代以降の日本の美術史のある種複雑みたいなものを見せてもらった。一直線の美術史だけでないものがかいに複雑に絡んでいるかということ、個別にはそれぞれ感じていたものを一気に見せられてすごいと思った。また、どの展覧会も内容的には質の高いものだったと認識している。

報告資料についてだが、展覧会毎の入場者数の記載はあるか。

館長： 次回からは記載するようにする。

加藤委員： なぜ、入場者数の話をしたかということ、想定していた入館者数が何人で実際は何人入ったのかということが比較としてわかると、夏場などがいかに大変かということのある程度数字で示せる資料となる。現在、気温の変化というのは、美術館が建てられた当時想定していた温湿度の範囲を超えている。また、災害に関しても台風の規模が大きくなっているということもあり、温湿度管理関係の整備というものの対策をこれから美術館はしていないと収蔵品にダメージを与えてしまうのではないかと心配している。特に空調に関してはそれなりの経費をかけて行う改修の範疇に入ってくると思うので、そういった意味で、例えば8月の現状を見ると1日当たり800人を超える入館者数があり大変だと思うので、こういった展覧会であればこういった現状であると、データ化をしつつ改修計画などがスムーズに進むと良いと思っている。

館長： いわゆる異常気象というものに対する対応は、当館に限らず全国の美術館・博物館で大変になると思う。それを踏まえて、副館長を中心に大規模改修の道筋を立てている。今年度は館整備の調査費がついているので具体的な道筋を立てていきたいと思う。

事務局： P28に顕神の夢展の入場者数を含めたデータ、P43に凱旋岡本太郎展のデータが記載されている。入場者数は顕神の夢展では17,111人、凱旋岡本太郎展では43,684人になっている。次回からはわかりやすく表記する。

長門委員： 顕神の夢展は、大変刺激的な展覧会であり、興味深く拝見した。17,000人の入館者があったと聞いて驚いた。他の4館はどうであったか。

館長： 入館者数としては当館では平均的な人数。他の4館についてもそれぞれの館の平均的な入館者数は入っている。SNSでの評判がよく、各館でカタログが会期半ばで売ってしまった。おそらく来館者の満足度は高かったのではないかと思う。

長門委員： 挑戦的な展覧会であって、来館者の反応はどうであったのかと気になった。わかりにくいという話もあったが、わかりにくい部分と逆に知識から

入らない方からの見た目、むしろ作品としてダイレクトに伝わるものがあるのだろうと思われる部分もあったので来館者の反応も聞いてみたいと思った。

橋本部部长： 文脈作りをどうするかというのが大切だと感じた。
知っているアーティストもいたが、こういう見方をしたことはないなというのを感じた。あのような文脈で 17,000 人を集客したというのはすごいと思う。
ところで、改修工事はいつか。

事務局： まだ、改修工事の次期は決まっていない。施設は 24 年を経ているので老朽化しており、痛みが出てきているところもある。そういったところの調査を行い、どういった対策をしていくかを今年度中には整理したい。大規模改修となると休館もともなうと思われるので、時期が来たら委員の方々にもお知らせしたいと思っている。現時点で、はっきりした時期等を伝えられる状況ではない。

橋本部部长： 世田谷美術館でも大規模改修が決まっている。
現在、改修箇所の洗い出しを行っている。調査を徹底的にやった方がいい。

藤嶋委員： 建設費はどうか。

橋本部部长： 建設コストはあがっている。また建設業界の働き方改革も影響し 1 年で終わった工事が 1 年半や 2 年になるということがある。世田谷美術館では要所を押さえた工事をするということは気を付けている。1 年度ではまとまった予算が取れないということは想定できるので、前倒しで小規模工事を行い、その後、大規模工事を行う。さらに出来なかった工事を数年かけてするというように、長いスパンで改修というプロジェクトを完成させるという考え方を採っている。

加藤委員： 以前にも改修工事をされていると思う。目に見えにくい部分の改修工事をされていて、再オープンした時、どこをどう直して何が良くなったかという内容のリーフレットを作られておりとても印象的で、良かった。目に見えない部分の改修工事は理解してもらいにくいということがあるが実はそこが一番大事であったりする。

【事務局より議題 2（資料収集・整理、調査研究）から議題 7（その他）について一括して説明】

加藤委員： 入館者数について、岡本太郎というアイコンをうまくわかりやすく提示し同時に深く知ってもらうことのバランスがいいということ、また、年間を通してさまざまなプログラムを実施しているということが入館者数の増加に繋がっていると思われる。非常にお手本となるような活動に思う。また、小学校の入館者が多いのは学校団体が増えてきているというところで理解しているが、とりわけ驚いたのは、高校生・大学生の入館者数が割合から考えるとかなりの伸びていること。何か工夫をしているのか。また、広報を少し早

めにしたとあったが、年度替わりの展覧会の広報を早めにするというのは、公立の館の場合は難しい状況を抱えがちだが、こちらではそれをどうクリアしているのか。ラゾーナ川崎とのワークショップについては、先方依頼ということだが費用はどちらが出しているのか。

事務局： まずラゾーナ川崎での活動については、先方負担で先方のスタッフとともに当館のスタッフ・JVスタッフも講師として参加して行っている。

加藤委員： 地域との連携というのは効果的で、地域との連携でもあり美術館のPRにもなるというのは非常に良い取り組みだと思われる。

事務局： 高校生・大学生については、積極的にこちらから働きかけをしているというわけではないが、修学旅行で来館するという学校が毎年それなりにある。また、川崎市内のみではなく横浜市など広い地域の高校での利用があり美術教育に力を入れている学校などが多い。国語の授業で採り上げて来館されたケースもある。先生が岡本太郎に熱心で、来館につながるということが割と目立つ。

加藤委員： 一番美術館から離れがちな世代と言われているので、うらやましい伸びに思う。

事務局： 中学生については宿題ツアーを毎年行っていて、これはその世代を狙って行っている。

館長： 若い方が来館している。週末には10代の方がよく来ており、常設展を見ていると、作品を観て「かわいい」という発言が聞かれる。見方が変わると価値観が変わるということを来館者から教わることもある。
年度をまたいでの広報については、前年度予算でフライヤーを作成するので問題はない。

事務局： 顕神の夢展のプレスリリースは、前の展覧会であった太郎賞の発表のタイミングで一緒に行っており、前倒しのスケジュールになっている。

加藤委員： スケジュールの問題だけで年度ごとの予算の問題は絡んでいないということか。

事務局： ポスター・チラシは前年度予算で作っているなので、問題はない。

加藤委員： 情報を出すには、ある程度予算が決まってからということもある。当館では、ホームページへ掲載する情報は年度が変わらないと出せないという状況であったりする。

長門委員： 制作はできるが議会を通らないといけないので、3月が情報解禁というようなことはある。

館長： 確定ではなく、実施予定というかたちでプレスリリースはしているので、問題はない。

事務局： 川崎市は広報を早めにするように徹底されているので、新年度予算の執行に関してはタイミングを考慮する必要があるが、広報についてはそれを待たず行うことが出来る。内容については予定という形で出している。また、広報の主要な部分を指定管理者が担っているという部分も大きいかと思わ

れる。

加藤委員： 広報については資料を拝見しただけでも、きめ細やかでありながらタイミングを逸していない感じがある。そういった積み重ねが今年度の入館者増に明らかに繋がっていると思われる。

藤嶋委員： 教育普及はすごく力が入っている。それだけの尽力・能力がすごいと思った。太郎だから敷居が高くない、やりやすいという部分もあると思うが。

館長： 最近いくつかの行政から美術館を作りたいという相談を受けているが、市立なら県立・国立よりも地域にいかにか密着できるかが運営の成功の秘訣であり、それには教育普及が大きな力を持っているということをお話している。それを、当館に着任してから目の当たりにしている。

藤嶋委員： 頭神の夢展も提携館は、市町村で、県ではない。

館長： いわゆる予算の少ない館が力を集めて、助成金を集めて大きなことを行おうという展覧会であった。

長門委員： 教育普及と地域連携をしっかりされていてその積み重ねは大きい。少し大人になりかけた子どもへの「宿題手伝いますツアー」など、子どもの頃来館したという経験はすごく大きい。そう言う意味でも地域の美術館という意味があると思った。館長が言うとおりの市の美術館は地域と教育というのがとても大事で、そこに力を入れて成果として出てきているのは素晴らしい。

橋本部長： 凱旋岡本太郎展のアンケートをみると良かったという人が99%、入館者は10代と20代で50%、しかも、初めてという人が71%。これほど大きな数字が重なることは普通ない。しかも年代的には10代20代で50%。この美術館のファンをものすごく開拓・拡大したと思われる。こういうものは後々まで効果を発揮すると思う。

普及イベントの件で、障がい者の方の観覧の話が出たが、もう少し具体的な話を聞きたい。

事務局： 障がい者向けのものも検討しているが、現在具体的に実施に向けて準備しているのは、認知症の方向けのプログラム。本年は試験実施とし、参加者の公募を行わず地域の方に声かけをしている。まずは外部講師を招いての実施であるが、当館のスタッフで実施していけそうであれば今後につなげていきたいと考えている。

館長： 障がいを抱えている方をふくめて今まで来館出来なかった方を受け入れるということは公立美術館の大きな課題であり、求められること。ただ、ある程度専門の知識や訓練を受けたファシリテーター、コーディネーターがいないと出来ない。それには、予算も必要になるし時間もかかるということもあるが、あせらず着実に行っていきたいと考えている。

また、凱旋岡本太郎展の入館者数について言うと、NHKの協力を得ることが出来たというのも勝因だと思う。学芸担当者が昨年度の展覧会でNHKには全面協力し、また、タローマンに関しては著作権者の条件があって断念しかけたところを粘り強い交渉をしたということで、NHKも協力しよう

ということになった。このようないろいろな意味での信頼関係が功を奏して、大きな記録に結びついたと思っている。

橋本部部长： 世田谷美術館では長い間、視覚障がい者のための試みをやってきた。フランスやイタリアなどの先進国でされている触察図を利用するなどいろいろしてきたが、最近 QD レーザーという機械を紹介され自身で使用してみた。それは、直接レーザーで網膜に映像を映すという仕組みで、弱視の方も角度は狭いが晴眼者とほとんど同じように見えるらしい。それは、弱視の方にとって驚異的な出会いと聞く。私たちは固定概念で、見えるか見えないかという観点でしか考えていなかった。しかし視覚障がい者の80%から90%が見えにくい人たちで全盲の方は10%程度。何をやっても見えない、ただ、なんとなく光を感じ、世界がシミのようににじんで見えているという方たちの鑑賞体験をどうするかということへも広げて考えていかなければいけないのではないかと感じた。全盲の人達に対してのアプローチはしてきたが、見えにくい人たちの意見を直に聞くという機会を作っていくことも大切と考えている。

QD レーザーは特許を採っていてそのメーカーしか出来ないものらしい。何かイベント的なことからしてみるといいうのもあるのでは。

事務局： QD レーザーは川崎市内の事業者。テレビ番組の QD レーザーを使って弱視の方が作品を見るという企画で当館が利用された。その関係で、QD レーザーの話聞く機会があった。事業者とも何かできないかという話も出ているところである。

加藤委員： 実験的にやってみるのも良い。どの様なプログラムをつくるかというスキルも必要になるだろう。
また、弱視の状態にもよるだろうが、iPad を使ってレンズ機能等で手軽に見てもらえることも出来る。いろんな方法はある様だが、その中でも直接網膜に移すというのはかなり画期的だと思う。

橋本部部长： コロナの間に電子媒体を使ったものやいわゆる IT 関係のものが急速に進んだ。こちらの美術館では、詳しい知識を持つ人がいないため、対応に苦慮するということはないか。

事務局： コロナになったばかりの時に VR 事業者と協力したことはある。

加藤委員： 専門的な知識を学芸員が持つというのは難しい。外部の事業者とうまい連携をどうとるのかということが必要となる分野なのかと思っている。

館長： 専門的知見を有する事業者に委託をするしかないと考えている。

加藤委員： 以前、非常に小さな会社であったが実験的に新しい分野の試みを美術館でやってみたいという会社があったので、一緒にやってみたことがある。ピーコンを使って歩いてある地点まで行くと iPhone で解説が見られるような仕組みのものであった。その仕組み自体は説明されてもなかなかわからないがコミュニケーションさえ取れば何か新しいことが出来る可能性があるとその時思った。

- 館長： コロナの時期はいろんな美術館が、バーチャルで行った気にさせるというものをネット上に出して一時話題になった。利用してみたが飽きてしまう。実際に作品を見るのとバーチャルで見るのは似て非なるものである。美術館は実際の作品を見せる、その感動を伝える場所という原点を持ってないと違うものになってしまう。広報のために活用するのは大賛成ではあるが、そちらを特化させるより、美術館に実際足を運んでもらって実際の作品を観てもらふこと、その感動を伝える場であるということに集中したい。
- 加藤委員： 確かにそうだと思う。コロナ後に美術館を再開したときに、お客様が口々に「こういうものを観るっていうのはいいね」と言っていた。再開して良かったなと思った。新しいことや映像についての要請も行政側からも有ったが、美術館は本物を見せる場所なのであくまでも本物が中心で、新しい技術を使用するにしてもハイブリッドであるということが原則だという様なことは考えていた。必ず本物につながるということが美術館の強みではないか。
- 事務局： 他館の事例として遠方から見学を考えているツアーや学校等が下見に時間や予算をかけられない時に VR が非常に役に立ったという意見を聞いている。
- 加藤委員： 確かにそういうことはある。以前、病院の中の学校で外出できない子どもたちに小さいロボット型のものを使って見せてあげることがあった。使い方はいろいろ考えられると思う。ただ、最後には「良くなったら美術館に来てね」というところに繋がっていくということではないかと思う。
- 館長： IT は美術館の活動や事業の周知に関しては効果的だと思う。ただ、それが目的になってしまうと違う。
- 加藤委員： 美術館としての他にない一番の強みを失ってしまうことになりかねない。
- 館長： これは学生に言っていることだが、見るということは情報処理ではない。美術作品はイメージの喚起力を一番持っているものだからそれを伝えるところが美術館というところである。
- 加藤委員： 美術館では触感や表現の様子、実際に見て想像より小さかったり大きかったりを子どもでも見て取れる。そういうところが面白いところ。
- 藤嶋委員： 市民ミュージアムの作品の修復についても、時々バーチャルでどこがどう損傷しているかなどと示してくれるが、わからない。ああいうものこそまさに現物で見せてもらわないとわからないと感じた。
- 橋本部会長： 世の中の年齢構成が変わっていく中で、美術館の様な施設がどういう風に社会貢献していくのかというのは大分手法が変わっていくのではという気がする。受け入れ態勢やアプローチの利便性をどうするかということもある。身近なところではバスの撤退などがあったりしていて、今後、アクセス面で後退していくことはあり得る。ただ、時代とともに色々あるが、岡本太郎の看板は強いし、今回の凱旋岡本太郎展では励みとなる結果が出ていると思う。
- 長門委員： 利便性が悪くても来たいと思うような展覧会をするというのが大事。

加藤委員：　ただ、高齢者のことを考えると交通の便は大切。

【その他】

特に質疑応答なし

○閉会